

21J-pm20

介護老人保健施設における心血管系疾患の治療及び予防に用いる薬剤の処方実態
○浜田 将太¹, 小島 太郎², 丸岡 弘治³, 石井 伸弥², 大河内 二郎⁴, 秋下 雅弘² (1医療経済研究機構, 2東大院医, 3介護老人保健施設 横浜あおばの里, 4介護老人保健施設 竜間之郷)

【目的】介護施設に入所する要介護高齢者において、心血管系疾患の治療及び予防に用いる薬剤 (CVD 薬) の使用については十分なエビデンスがない。本研究の目的は、介護老人保健施設 (老健) の入所者における CVD 薬の処方実態を明らかにすることである。

【方法】全国の老健に質問紙調査を行い、1施設あたり最大5人分の入所者背景及び処方データを収集した。入所時及び入所2ヵ月時の定期処方薬の使用を評価した。ロジスティック回帰分析により、CVD薬の薬剤クラスごとに処方に関連する因子について検討した。

【結果】対象者は1,324人であり、75%が女性、平均年齢は85歳であった。入所時の薬剤種類数は6.0種類、入所2ヵ月時は5.4剤であった。そのうち、それぞれ2.0及び1.9種類がCVD薬であり、入所時から入所2ヵ月時でCVD薬は0.1種類減少した。入所者の半数が降圧薬 (53.2%→50.8%)、1/4が抗血小板薬 (25.2%→26.4%) 及びチアジド以外の利尿薬 (23.4%→24.4%)、1/10が糖尿病用薬 (11.6%→11.0%)、経口抗凝固薬 (11.1%→10.6%)、脂質異常症用薬 (14.7%→10.4%) が処方されていた。性別、年齢、要介護度、脳卒中又は心筋梗塞の既往といった入所者の特性がCVD薬の処方と関連していた。

【結論】老健入所者におけるCVD薬の処方割合は高く、全定期処方薬の1/3を占めていた。一方で、薬剤種類数の減少に占める割合は1/6であった。介護施設に入所する要介護高齢者におけるポリファーマシーに対処するためには、CVD薬の処方及び減薬の意思決定に有用なエビデンスが求められる。